

一世お鯉

長谷川時雨

青空文庫

「そりやお妾めかけのすることじゃないや、みんな本妻のすることだ。

姉さんのしたことは本妻のすることなのだ」

六代目菊五郎のその錆さびた声が室の外まで聞える。

真夏の夕暮、室々のへだての襖ふすまは取りはらわれて、それぞれのところに御簾みすや几帳きちょうめいた軽羅うすものが垂たらしてあるばかりで、日つ常ねの居間いままで、広々と押開かれてあつた。

打うちみず水みづをした庭の縁を二人三人の足音がして、白地の筒袖つつぽの浴衣ゆかたを着た菊五郎が書生流に歩いて来ると、そのあとに楚々そそとし

た夏姿の二人。あつさりと水色の手柄——そうした感じの、細つそりとした女は細君の屋寿子で、その後は、切髪の、黄昏の色にまがう軽羅うすものを着て佇たたずんだ、白粉おしろいけ気のない寂しげな女。

「ほんとに姉さんつまらないや、そんなことをしたって」

主人はそういつて、今までのつづきであつたらしい会話のきりをつけた。

切髪の女は、なよやかに、しかも悩ましいほほえみを洩もらした。

すなおな、黒々とした髪を、なだらかな、なまめかしい風もなく髻もとどりを堅く結んで切下げにしていた。年頃は三十を半なかばほどとは考

えさせるが、つくろわねど、この美貌きりようゆえ若くも見えるのかも

知れない。といつて、その実は老ふけさせて見せているかも知れない。

ほんのりと、庭の燈籠とうろうと、室内にもわざと遠くにばかり灯ひともさせたのが、憎い風情であつた。

「お鯉こいさんです」

そうであろうとは思つていたが――

切髪の女は小さい白扇はくせんをしずかに畳んで胸に差した――地味じみな色合――帯も水色をふくんだ鼠色で、しよいあげの色彩も目立たない。白い扇の、帯にかくれたさきだけが、左の乳首の下あたりりに秋の蝶のとまったようにびったりと……

黒い夜空においそめた明星のように、チラリチラリと、眼をあげるたびに、星のような瞳ひとみが輝き、懐なつかしいまたたきを見せる。唇くちびると、眼とに、無限の愛あい敬きやうを湛たえて、黒いろ紹ろの、無地の夏

コートを着て、ゆかしい印象を残してその女は去った。

「ほんとにあの女は、良い人間すぎてね」

それは誰れやらの老女の歎息であつた。

一世お鯉——それは桂さんかつらのお鯉さんと呼ばれた。二世お鯉——

——それも姐さんねえの果報に負けず西園寺さんさいおんじのお鯉さんと呼ばれた。

た。照近江てるおうみのお鯉という名は、時の宰相の寵おもいもの姫ひめとなる芽出めで

度たき、出世登竜門ごうもんの護符ごふのようにあがめられた。登り鯉とか、出

世の滝登りとか、勢いのいいためしに引く名ではあるが、二代揃そろう

つての晴れ業わざは、新橋に名妓は多くとも、かつてなき目覚めざましいこ

ととされた。

照近江のお鯉——あの、華やかに、明るく、物思いもなげな美しかった女が、あの切髪姿の、しおらしい女人かと思ひめぐらすときに、あまりに違つた有様に、もしや違つた人の頁を繰つて見たのではないかといふ審しみさえも添つた。

わたしの心に記憶する頁——それには絵もある。またおぼえ書きもある。みんな岡目おかめから見たもの聞いたものにすぎないが、わたしはその人自身から聞くよりさきに、その覚え書きも持出して見ようとしている。

奠都てんと三十年祭が、全市こぞつて盛典として執行されたおり、種々の余興が各区競つて盛大に催された。とりわけ花柳界の気組きぐみは

華々しかつた。世はよし、時は桜の春三月なり、聖天子万機ばんぎの朝政みそなわを嚮すによしとて、都とさだめたもうて三十年、国威は日に日に伸びる悦賀よろこびをもうし、万民鼓腹して、聖代ことほを寿ぐ喜悅たのしみを、おおよけ公にも、しろしめせとばかり、あるほどの智恵囊ちえぶくろを絞り趣向して、提灯ちようちんと、飾物かざりものと、旗と幔幕まんまくと、人は花の巷ちまたを練り歩くのであつた。ことにそのなかに、面白き思附き、興みものある見物として大名行列があつた。それは旧大名の禄ろくだか高多く、格式ある家柄さんきんこうたいの参観さんかん交代こうたいの道中行列にならない、奥向の行列もつくつたのであつた。衣裳いしやう調度は出来るだけ華美に、めざましいほどに調ととのえられた。その人数には、俳優、芸妓、旦那衆、画家、芸人、はなしか嘶家おも、たいこもち、金に糸目をつけぬ、一流の人たちが主な役

柄かに扮はし、お徒歩かち、駕籠かごのもの、仲間ちゆうげん、長持ながもちかつぎの人にん、足くにいたるまで、そのないものが適当てきとうに割当わりあてられ、旧幕時きゅうまくとき代の万事ことを知るものが、その身分々々によつて肝煎きもいりをした。真まにまたと見ることの出来ぬと思おもわれるほどの思おもいつきで、赤あや浅あ黄さぎの無垢むくを重ね、上じつとくに十徳じつとくを着きたお坊主ぼうずまでついて、銀の道具ぎんのかぐのお茶所ちやしょまで従したががつていった。

その行列ぎょくが通とるのをわたしは柳橋やなぎはしで見た。勿論もちろん土地ちの売うれつ妓こたちは総縫そうぬいの振袖うちかけや、袿うちかけを着きた、腰元こしもとや奥女中おくにようぢゆうに、他の土地ちの盛り場おんなの妓こたちと交まじつていたので、その通行つうぎょうのおりには大變たいへんな人ひと気きであつた。

柳橋やなぎはしの裏河岸うらがしの、橋はしのたもとから一、二軒目いっしけんめに表二階うらふたかいに手摺てすりの

ある、下にちよいと垣を結うた粹いな妾宅があつた。裏へ抜けければ、じきに吉川町へ出て、若松家という古い看板の芸妓家へとゆくことが出来るようになっていた。妾宅のあるじは若松家の初代小糸といった女ひとで、お丸さんという名であつた。その時分若松屋には三代目の小糸という雛おしやく妓も、お丸という二代目も出ていた。――（そのお丸さんはいま、稀き音屋ねや六四郎の細君になっている）妾宅の方のお丸さんは、すらりとした人で、黒ちりめんの羽織のよく似合う、そんな日でも、別にめかしてもいなかつたが、人好きのする美人で、足尾あしおの古河市兵衛氏の困こいものだつた。その二階に招よばれて、わたしは綺麗な女たちを面おもうつりするほど多く眺めた。

その行列の、美しい御殿女中のなかに、照近江のお鯉も交つていたのか、ほどなく、わたしは一枚の彩色麗しい姿絵を手にした。桜のもとに短冊をもっている高島田の、総縫の振袖にたてや豎矢の字、べっこう鼈はなこうがい甲の花ひらうち筭も艶ならば、平打の差しかたも、はこせこの胸のふくらみも、緋ひぢりめんじゅばんの襦袢の袖のこぼれも、惚ほれ々々とする姿で、立っているのだった。

それ以来、わたしの心のおぼえ帳には、美しき女お鯉の名が消されぬものとして残った。

「横浜の野沢屋さんの大奥おおおくさんからおつかいものでございませぬ。なんでも六代目さんなんぞは、「お母さんつか」というふうにお呼びなすつてるようですね。尊敬あがめてなので御座いませうけれどもね」

その遣いつかいものが、衣服の時があり、手道具の時があり、褥しとねの時があり、種々さまざまであるけれども、使いは同じ人にさせているということ、女小間物屋こまものやさんは語った。

「羽左衛門うざえもんさんのところ、梅幸ばいこうさんのところ、それから六代目さいわいちようさん。六代目さいわいちようさんは附属なんです。そりや火鉢だんなだつてなんだつて、拵こしらえておあげになるのです。たいした檀那だんなでございませぬよ」

泉鏡花さんの「辰巳巷談たつみこうだん」に出てくる沖津おきつのような、江戸っ子で歯ぎれのよい、女でも良いものばかりを誂あつちえられて納めようというおメさんが、自分の吐いた煙のなかで、ちよいとさげすみ笑いをしたが、

「だが、お鯉さんは好い気風きつぷでしてね。馬鹿だなんていう奴がドサの慾張りなんです。そりや利きればなれがよくつてね、横浜からの遣いものなんざ、貰もらうとすぐに、来たもの徳どくで、こんなものやろうかってやつちやうんですからね、さつぱりしたものでさあ。知れたつてすこしも恐れるんじゃないから好いいでしよう。あたしやあ好きでしたね。お使いにたつて持つてくときもありましたが、見ていてグツと溜りゆう飲いんがさがつちやうので、かまうもんですか、

やつちやいなさいよ。旦那がやかましく仰しやりや、またこしらえさせますからさつて、唆けしかけたものでさあ」といいながら、器用に、ポンと音をさせて煙管キセルの吸すい殻がらを吐はい月つき峰へはたいた。

「けれどお鯉さんもたいていじやなかつたのですよ。一体無頓むとんち着やくなのに、橘たちばな屋やときたら、そのころはしどい借金だったの

ですからね。厭あきもあかれもしやあしないでしょうが、母親が承知しない。それや羽左衛門のおつかさんは実に好い人で、どっちでも向いているという方を向いている人でしたけれど、お鯉さんの方が承知しやあしません。もともと市村いちむらへやったのは、浮気をさせておいては、いつまでも止めないから、一度嫁にやって

しまおう、そしたら、なんぼなんでも、いくら惚ほれてるからって、あの貧乏じゃお尻しりが落附くまい、かえって思いきらせるには好いからって魂胆こんたんで嫁やったんだって言いますものね。嘘うそじゃあないでしょうよ、なにしろ強しつかりしていますからね、養母ようぼって言う方ほうが——ええ、二人ありますとも、お母さんを二人しよってるのですから、あの女ひとも大變だいへんですよ。おまけにお母さん次第しだいになるのだから」

売れっ妓このお鯉こいが、洗い髪のおつまが坐らなければならなかつた市村いちむらの家の、長火鉢ながひばちの前におさまった当時の様子ようすが、お母さんの言葉ことばによつて見える。おつまは失意しつゐの女むすめとして、三十間さんじゅうけん堀ほりのある家の二階にがいから、並木なみきの柳やなぎの葉はかげ越しよこしに、お鯉こいが嫁入よめいりの、

十三荷の唐草からくさの青いゆたんをかけた荷物を、見送っていたのだときいている。やがてお鯉も、自分と同じ運命になるだろうと思つたと言つたというが、お鯉もまた二、三年すると、そのの、長火鉢の前の座布団ざぶとんの主ぬしとして辛抱することが出来なかつた。恋女房であろうとも、家の者となればあしらいも違ふ、まして人気商売ということによつて、いかな口実もつくられる。その上に内ないし所よは苦しい、お鯉のお宝は減るばかりだつた。そこで見て見ぬふりもならぬとなつたのは、養われなければならぬという二人の老母の、ひそひそ話の結果であつた。

去るものは疎うとし——別離は涙か、嘲罵あざけりか、お鯉は昔日むかしよりも再勤のちの後の方が名が高くなつた。羽左衛門たちばなやのお鯉さん、桂かつらさんの

お鯉さんとよばれる一代の寵妓ちようぎとなつた。先夫が人氣の頂上にあつた羽左衛門であることも、後の旦那が総理大臣陸軍大将であることも、渦巻の模様を中心となつた流行はやりツ児この俳優やくしや——ニコポン宰相の名を呼ばれ、空前とせられた日露戦争中の大立物おおだてもの——お鯉の名はいやが上に喧伝けんでんされた。

「どうしてどうして現今いまのおはるさん（羽左衛門の細君の名）は働きものです。それは自分の持つて来たものはあるけれど、どうしても養母おつかさんが強しつかりしているから、なくなさせやしません。あの細君が来てから、不義理はみんなかえしたのです」

羽左衛門が年少で、技芸わざも未熟であり、給料も薄く、そして家

には先代以来の借財が多かった時分に、身の皮まで剥いて尽したのが洗い髪のおつまみである。ままにならぬ世を果敢はかなんだ末に、十八の若旦那市村は、身まで投げたほどだった。おつまはその心にほだされて、ありとある事を仕尽したが、結局はお鯉が嫁入りするようになった。もうそのころ羽左衛門は昔日むかしの若造でもなければ、負債があるとはいえ、ひっぱりだこ風の青年俳優であった。またその次の細君の時代は、羽左衛門の一生に、一番は覇のばを伸しかけた上り口からで、好運な彼女は、前の人たちの苦心の結果をいっか攫くってしまったのであった。

「お鯉さんときたら、あんまり慾がなくて、だらしないくらいでしたからね、あれじゃとても羽左衛門は立ちませんでしたあね。

なんしろ手当り次第にやっちゃまうのでしたからね。誰れか下の者が訪ねてゆくでしょう「お前に何かやりたいねえ」というと、何処からか到来物らしい、新しいラッコの帽子を、そらきた、とやるのですからね。一事が万事で大変でさあね」

猫背な三味線の師匠は、小春日和の日を背中にうけた、ほっこりした気分で、耳の穴を、観世縫でいじりながら、猫のようにブルブルと軽く身顫いをした。人気俳優の家庭を知っていることに聴手が興味をもつであろうと思つて、そのくせ自分はキョトンとして居睡りの出そうな長閑な顔をしていた。

すると、太棹の張代えを持って来て見せていた、箱屋とも、男衆とも、三味線屋ともつかない唐棧仕立の、声のしやがれた

五十あまりの男がその相手になつて、

「なにしろかまわずお金も借りたというじやありませんか」

といつて、サワリを一生懸命に直していた。

「そりやあまあ、本当だか嘘だか知らないがね」

「いいえ、旦那の知らない借金が、いつの間にか増えているんだ

そうですよ。あのずぼらやさんが吃驚びっくりなんだから、輪をかけた

呑気のんきな女だったと見えますね」

「これを着ておいでつていうと、紋付だろうがなんだろうが、其

処にあるのを手あたりまかせだったというからね」

「お気に入ると儲もうかったのだがね」

しやがれた声はカラカラと高く笑つた。

「しかし、たいしたものだって言いますよ。麻布のお宅あせぶというの
はね、あの女の居間ひとの天井は、古代更紗こだいさらせで張つてあるのですとさ、
それが一寸すん何円てしようっていうのだから剛勢じやありませんか、
何しろ女に生れなけりや駄目ですね」

「だが、やっぱり二人老母ばあさんが附いてるのだろう」

「そいつが厄介ですね、別にすぐそばに一軒、家が建っています
がね」

わたしはぼんやりと、そんなことも聞いていた。

やがて日露戦争は終局に近づいたが、それに従つて国内の景況
は不穏になつて来た。いわれなき講和、償われぬ要求であると、

内閣不信任は喧かまびすしい喧けんそう噪そうとなつた。寵ちよう妾しやうお鯉の家に大臣は隠ひそれているといつて、麻布の妾宅焼打ちを、宣伝するものがあった。日比谷ひびやには騒そう擾じようが起り、電車焼打ちがあつて、市内目抜きめぶきの場所の交番、警察署、御用新聞社の打壊こわしなどがはじまり、忠良なために義憤しやすき民衆は狂暴にされ、全市に戒嚴令が布しかれて三々五々、銃をもち剣を抜いた兵士が街路たむろに屯むろし、市中を巡羅するようになった。無辜むこの民の幾人かは死し、傷つけられ、監獄につながれたりした。その騒動に、お鯉は何処どこにかくれていたか、もとより彼女の家は附近に隙間すきまなく護衛が配置されてあつた。

その頃のお鯉は出世の絶頂で、勢いは隆々としていた。多くの

政客も無論出入していた。大阪の利きけもの者岩下は最も頻ひんぱん繁はんに伺候していた一人である。

秋風一度吹いて、天下の桂の一葉は散つた。その大樹のかげによつて生ていたものは多かつた。そして凋ちようらく落らくをまぬがれなかつた。被おほうものがなければ日の目はあからさまである。冷たい霜も降る、しぐれもわびしく降りかかる。木こがらし枯かしも用捨なく吹きつける。さしにも豪華をうたわれた岩下氏もある事件に蹉さてつ跌てつして圜いごにつなされる運命となつた。名物お鯉も世の憂うきをしみじみとさとらなければならなくなつた。

五万円の遺産分配——それは名のみ、お鯉のために分けられたというよりは、公爵の遺児で、表面夫人の手には引きとられぬき

わに出来た、泰三、正子、の六歳と九歳になる子たちを、引取つて育てていたからのことであつた。お鯉はそのため切髪とならなければならず、思いもかけぬ子に母とよばれなければならぬことになつた。そうした考かんがえ慮が、お鯉自身から生れようか、生れるはずがないのである。

柳橋に、一藤井いちふじいという、芸妓を多勢抱かかえている家があつた。

そのの、あんまり名も知れない抱え芸妓のひとり、どうしたところか桂公のおとしだねだということが知れた。そんな始末もお鯉がするようになった。妹ともよんでよい年頃の女に母と呼ばれて、お鯉はどんな気がしたであらう。その女をとにかく一いっかど角の令嬢仕立にするまでお鯉の手許てもとにおいた、そして嫁入りをさせて安心

したといった。しかしやがて五万円は諸々もろもろの人の手によつて手た易やすく失われてしまった。

「お妾のする仕方じゃない」

それらを考えるときに、その言葉が生いきてくる。

そのころのお鯉の生活の逼迫ひっぱくが、おメさんの口から、ちらりと洩もらされたことがある。

「金にあかしてこしらえたものも、こうやって二束三文に手離しておしまいなさるんですよ。お気の毒さまですね、お邸こそ以前もとのままですけれど、おはなしになりますんやね。いまじゃ米屋が強こわ面で催促こわもてしていることもありますものね」

おメさんにも多少の感慨はあるか、金の義歯いればのチラリと光る歯で、四分一の細い吸すいくち口をくわえたまま、眉間みけんにたて皺しわを二本よせて、伏目くしになっていた。

「お髪ぐしのものもなにも、あれじやもう入りません。けれどおかわいそうです。あの気性じやたいへんです」

その折り、麻布の家に一人の青年がいて、その人が一人お鯉のことに誠実を尽してやっているといった。またしばらくたってから来ると、こんどはその青年が、下にもおかずもてなされているらしいことを語った。

「食事でもなんでもお上かみどお通りで、お鯉さんとひとつに食たべるのですよ。あの方が身を立たててあげればだが、お鯉さんもそれまでには

また一苦勞ですな

と、隠居たちが派手なしきたりや、お鯉自身もどんなに困つても昔時の通りだということ、どうしようもないようにつぶやにむかし呟くように話した。

おメさんは、お鯉の眞実の親は、ほんとには誰だか分らないのだとも言った。清きよもと元倉太夫の子だというがそれは貰もらいつ兎こで、浜町花屋敷の弥生やよひの女中をしていた女が、藁わらの上から貰もらつた子を連れて嫁入つたのだとも言った。

「お鯉さんは清元が上手ですよ、養父さんがしこんだんですからね。十三くらいに、弥生さんの手伝いをしていて、それから花柳

界へ出たのです。豪勢な出世もしたかわりに、これからが寂しいでしょうね、肩の荷のなくなつた時分にや、もう老ふけ込んでしまひますからね」

名物お鯉の後ごにちがたり日譚は、脛なますになつても生いきづく作りのピチピチとした生のいき好いものでなければならぬと、わたしはひそかに願つていた。すると、かなしいことにお鯉は永平寺の坊さんの、大黒だいこくになつたという腥なまぐさい噂うわさを聞いた。おやおやと落胆してしまつた。願うのではないが、有為の青年と、真に目覚めざめた、いままでの生涯に、夢にも知らなかつた誠実を糧かてにして、遺産は子供と母親たちに残して、共に掌てに豆をこしらえるふうになつてしまつたとき

いたならば、わたしはどんなに悦んだであろう、それこそお鯉さん万歳をとなえたかも知れない。しかし、いかに、暖かい褥しとねにじつとしていたいからとて、母親の御意のままになるがよいとて、人もあろうに出家の外妻とは、どうした心の腐りであろうと、好きな女であるだけに厭いやさが他人ひとごとではないような気がした。とはいえ坊さんにだからとて恋がないとはいえないと弁護をして見ても、お鯉がその青年を捨すててまで、または捨すてられたとしても、それにかえるに老年の出家を選もう訳がない。そこにはどうしても物質から来た賤いやしい目的が絡からまなければならぬ。

彼女は大森にいと伝えられた。生なまむぎ麦にかくれているとつたえられた。鎌倉に忍んでいと伝えられた。

多恨なる美女よ、涙なしに自身の過去すぎこしかたをかえりみ、語られるであろうか。わたしはあまりに遠くから聴き、また見た記憶のまぼろしばかりを記しすぎた。近づいてあきらかに今日の彼女を知らなければ心ない噂と、遠目の彼女で全体をつくってしまふ恐れがある。折よくも彼女は彗星すいせいのようにわたしたちの目の前に現われた。銀座のカフェー、ナシヨナルは彼女が新あらたに開いた店だということである。わたしは其処へ行って、親しく、近しく、彼女の口から物語られる彼女を知ろうと思う。

大正九年も終る暮の巷を、夕ぐれ時に銀座の、盛な人渦の中を、泳ぐというより漂つてわたしはいつた。

クリスマス前の銀座は、デコレーシヨンの競いで、ことに灯ともし時の眩ぐるしきは、流行の尖端を心がけぬものは立入るべからずとでもいうほど、すさまじい波が響みうねっている。これが大都会の潮流なのだろうと、しみじみと思わせられながらわたしはゆく――

今年の花時、花が散るとすぐあとへ押寄せてきた、世界大戦後の大不況のドン底の年末だとは、銀座へ来て、誰れが思おう、時計に、毛皮に、宝石に、シヨールに、素晴らしい高価を示している。そしてその混雑の中を行く人は、手に手に買物を提げている。

高等化粧品を売る資生堂には人があふれている。それも婦人ばかりではない、男が多かった。関口洋品店は流行のシヨールがかけつらねられて、明るさはパリーなどを思わせるようで、その店も人でざわざわしていた。美濃常みのつねでは、帽子や、手袋や、シャツや、どれが店員なのか客なのか、見分けられないほどに黒く白かった。わたしはその中をぼんやりと歩いた。

華やかな笑い声みいだがきこえる。はつと我にかえると羞明まぶしい輝きの中にたっている自分を見出した。そして前には美しいシヨールの女の五、六人が、中を割って、わたしを通して行きすぎた。すぐまたその後へ、キッチンとした洋服の、すこしも透すきのない若紳士の群れが来る。わたしはしどろもどろである。乾かわいて来た洗髪に

ピンがゆるんで、束髪そくはつがくずれてくる煩うるささが、しやつきりして歩かなくなつてはならない四辺あたりと、あんまり不似合なのに気がつく
と、とつて帰りたいようになった。

三丁目で、こんな店も銀座通りにあるかと思ふような、ちよつとした小店で、眉毛まゆげを剃そつたおかみさんが、露地口ろじぐちの戸の腰に雑ぞ巾うきんをかけていた。聞きよかろうと思つて、カフェーナシヨナルは何処ですかと問うと、

「知りませんねえ、そんな家は。カフェーっていう洋食やならありますけれど」

わたしはまた、銀座通りの店にこうした女房おかみさんもあるのかと、お礼を言つて離れた。

おわりちよう

尾張町の交番でたずねると、交番の巡査は知らないと言った。

すると直すぐそば傍に、青に白の線のある腕章をつけた交通巡査がいて、

「あるある、出いずもちよう雲町の交番の裏だ」

と深切におしえてくれた。わたしはこのごろ、こうした事を巡査や交番で聞くことが、大層自然になつて、すこしも気まりが悪か
つたり、嫌な思いをすることがなくなつた。ただ、裏という言葉
をハッキリ聞いておかなかつたのを不安に思った。

間もなく出雲町の角の交番の前へたつたわたしは、丁寧におじ
ぎをしていた。

「この交番の裏ときいて参りましたが、この横町に御座いましよ
うか？」

すると若い、いかにも事務に不馴ふなれのような巡査は、全く当惑したように固くなつて、わざわざ帳面など繰りひろげて見たりしてくれた。わたしは光りの流れてくる資生堂（食堂）の明るい店内を見ていた。白い着物が寸分の絶間なく動く、白い皿が光る、ホークとスプーンとがきらめく、熱い飲料の湯気が暖かそうにたつ、豊かそうに人が出たりはいったりする。わたしもあそこへ腰をかけて、疲れを癒いやして、咽喉のどもうるおして、髪でもかきあげて訪たずねるところへゆくとしよう。それにあすこで聞けば直じきに分るであらうと、そうしようとする、

「向うの横へ曲つて、そして右へいつてごらんさい。たしかそんな家があった気がする」

親切に、一生懸命考えてくれて、すこし曖昧あいまいではあるが、そうらしいからと教えてくれた。それを聞くとわたしは、裏というのは後を意味しているであろうことや、資生堂の暖かそうな飲のみも料のは、理窟りくつなしに捨ててしまつて「違つているぞ」と承知しながら、その方へむかつて歩みを運ぶのであつた。

築地つぎじの海軍工場がひけたのであろう。暗い方から明るい方へと、黒い服のかたまりが押して来た。せまい歩道の上は、この人たちの列で、気の弱いものは圧倒され、たじろいで、立つて待つていなければならなかつた。若い娘たちは、下駄の齒をならして、おなじように厚いシヨールを前に垂らして、声こゝろ高だかに話合つてゆく。まるで疲れを知らないようであるが、あの明るい町を突つ切つて、

暗い道にひとりひとり散らばってからは、どんな心持ちであろう。現在のわたしがそうした状態なのだが――

三十間堀に巡査の教えた家があるうはずはなかった。わたしはぐるりと廻って新橋のたもとへ出た。その角にあるカフエーの横の扉とびらに、半身を見せて佇たたずんでいる給仕女ウエートレスがあつたので、ためらわずに近寄つてきくと、その娘は気軽くて優しくかつた。こちらからゆけば資生堂の一、二軒手前で、交番のじき後になっていることを、すこし笑いながら言つて指差して知らせてくれた。わたしも微笑ほほえましくなつた。若い娘さんに若い巡査さん、どっちも良いい人で、好意をもつてくれたことを感じた。娘さんにお礼をいつて、笑いながら別れて、ぐるりと廻つて交番の近くまで帰つてゆ

くのに、先刻おしえてくれた巡査の目にとまりたくないと思つた。折角の好意が無になつて、妙なものになるであらうと思ひ思ひ行つた。

冬ふゆもや霽あが紫にうるんだような色の絹のカーテンが、一枚ガラス

の広い窓に垂れかけられて、しつとりと光つているところに金文字でカフエーナショナルと表わしてあつた。外飾りなど見るひまもなく、周章あわてで、扉の口へとびこんだ。カフエーへだとして、飲のみも料のがほしければはいりそうなものであるが、若い人の、歡樂境ののようにされてるそうしたところへは、女人おんなはまず近よらない方がいいという、変な頑固がんこなものが、いつかわたしのめんどくさが

りな心に妙な根をはっているので、不思議なはにかみを持って扉の中へはいった。

下足にお客でないことを断つて来意を通じてもらうと他の者が出て来た。また繰返していうと、こんどはかすりの羽織に袴はかまをつけた、中学位な書生さんが改めて取次ぎに出た。わたしはぼんやりしながら、三度目の繰返しをした。当の主人公は知つていても、此処の周囲の人たちは、変な来訪者だと怪訝けげんに思ったに無理はない。

わけまえがみ
おもた
分前髪わけまえがみの、面立ちおもたのりりしい、白粉おしろいのすこしもない、年齢よりはふけたつくりの、黒く見えるものばかりを着た、しつとりとした、そのくせ強しつかりとしたところのある、一目に教育のあることの知れる婦人が出て、あいにく逢えないことを詫わび、明日の

時間のことについて、二言三言丁寧な挨拶あいさつがかわされた。わたしはその方との打合せでほつとした。カーテンのうしろの卓には、お客もあつたであろう、二階の階段の下には、一かたまりになつて美しい女たちもいた。いつまでも硝子戸ガラスを後にして立っているわたしの背は、歩道からまる見えであると思うと、厚かましい気がしてならなかつた。

さてわたしは此処で、明日にうつるまえに一筆しておかなければならないのは、お鯉を書こうとするに、その人の近事をあまりしらなすぎる。わたしはナシヨナルで応待した婦人を、店の商業の方には、すこしも関係のない、子たちの家庭教師であろうと、

勝手にそう思っていた。あとで人にはなすと、『都新聞』^{みやこ}を読まないのかと言われた。わたしは『都新聞』を読んでいなかったの
で困ったが、お鯉さんの妹で、大変強^{しっ}かりもののおかみさんが、
帳場を一切処理しているというから、その婦人でしょうと、その
人は言った。勿論それはあとで書くことと前後して、わたしも妹
御^ごだと知ったあとゆえ驚きはしなかったが、わたしはこれから、
この奇^くしき姉妹と卓をかこんで、打解けた物語をしたあらましを
書いて見よう。

四

その日は前の日と違って、雨がかなり激しく降っていた。ずっと前に降った雪が解け残って、裏町の日かげなどに汚なくよごれて凍っているのを、洗いながすように、さほど寒くない雨であった。気温は冬としてはゆるんでいた。わたしは人力車を約束の十時までに着くように急がせた。

まだ店の窓にはすっかり白い幕が下げてあつて、扉の片つぽだけ白い布があげてあつた。朝のことゆえ遠慮なく戸口を開けてはいり案内を乞うた。

店の中は——白い布を、扉の半開きだけあげた店の中は、幕開き前とでもいうように混沌こんとんとしている。睡眠気分三、夜明け気分七——昼間がちらと、差覗さしのぞいているといった光景であつた。

わたしは思いがけぬ「カフェーの朝の間ま」というところを見て、劇場の舞台の準備を眺めているような気持ちで佇たたずんでいた。

昨夜は気がつかなかったが、大方外に立ってかけられてあつたのであろう。クリスマスデナー開催の立札の、框張わくばりの大きなのが立たてかけてある。食券三円云々とするしてあつた。階段の上り口には赤い紙に白く、「世直し忘年会、有楽座において」とした広告ビラが張つてあつた。

鳥打ち帽しまに縞しまの着物の、商人の手代てだいらしい人も人待ち顔に立っていた。奥の方から用談のはてらしい羽織を着た男が出て来て、赤い緒ぞうりの草履たかげたを高下駄はに穿はき直して出ていった。わたしは取次ぎをまつて佇たんでいた。

どこカフエー
何処の珈琲店にもある焦茶こげちやの薄絹を張った、細い煤竹すすだけの骨
の、帳とぼりと対立ついたてとを折衷したものが、外の出入りの目かくしにな
つて、四鉢ばかりの檜葉ひばや槇まきの鉢植えが、あんまり勢いよくはな
く並べられている。その後には白蠟石しろいしの小卓が幾個か配置されて
ある。その卓のつつきの一つで、小柄な娘がナフキンを馴なれた
手附きでせつせと畳んでいる。頸くびに湿布しつぷの繻帶ほうたいをして、着流し
の伊達だてまきの上へ、緋ひの紋ちりめんの大きな帯上げだけをしよつ
ている女は、掃き寄せを塵取りちりとにとつたりして働いていた。やが
て、お酒と、煙草と、夜更よふかしと、おしやべりとで、声がつぶれて
しまったのであろうと思われる、不思議な調子の若い男が、短ちよつ
衣きで出て来て、キャラキャラした声で来意をたずねた。

短衣の小男は人気者と見えて、すこしの間にみんなから話しかけられていた。階段の下の、酒場の掃除をしている二、三人の娘たちは、その男の名をケンチャン、ケンチャンと呼んでいた。

酒場の娘の一人はこんなことをいつていた。

「随分飲んだわ、なんとかいっちゃ一ぱい、かんとかいつちやあ一ぱい……」

「……あたしね、一万円あれば八千円で帯を買って、あとの二千円は……とかする」

ケンチャンがその時なかなか面白いことを言ったに違いなかった。みんな元気に機嫌きげんよく笑ったが、聞きつけないものには、何をいつているのか、あんまりな上うわごえ声で、まるでわからなかった。

すると、ナフキンをたたんでいた娘が、

「ライオンは多田さんという人がいるのよ、そりや面白いってつちやないの、（よくって多田さん、それじゃこれ無代ただよ、無代ただよ）
つてみんなが言うのよ」

それが、言う人には非常に興味ありげであつた。そのとき黒い服を、ちゃんと身につけた給仕長らしい男が迎えに出た。そしてわたしは二階に導かれた。

表二階の食堂を通りぬけると、間の室へやは二階の給仕娘の控室であるらしかった。

裏階段のあるところで、四、五人が着物を着たり身づくろいを

していた。わたしは其^{そこ}処も通りぬけて、奥まった別室へ通された。
 手はこびの暖^{すとうぶ}炉がはこばれた、温^{あつたか}いお茶もある、新聞もある、
 心地よい長椅子もある。しかし土曜の午後を楽しんで鶴^{つるみ}見へ一緒
 にゆく事になつてゐるちいさい甥^{おい}が、学校でさぞ待つてゐるであ
 ろうと思えば、心閑^{のど}かにしてゐる間が、おいしい気がするのだつた。
 室^{へや}の隅には二枚折りの金^{きん}屏^{びょう}に墨絵、その前には卓に鉢植の木^ぼ
 瓜^けが一、二輪淡紅の蕾^{つぼみ}をやぶつてゐた。純白な布の上におかれた、
 小花瓶の、狷^{しやうじやうひ}々^ひ緋の真紅の色を、見るともなく見詰めていた。

控間では一時騒^{さわ}めいてゐたが、

「貴女もお湯にいらつしやる」

「ええ」

「じゃ御一緒に行きますから待ってて頂ちようだい戴だいな」

静かになった。すると、此家ここでか、または裏の家でか、下の方の裏で物音がした。

「お風呂がもう沸きますが……」

「自動車になさいますか、おくるまになさいますか？」

下男といった調子に聞いた。やがて何処からともなく、お皿やホークの音が、時々ガチャガチャと聞えた。

もう朝じゃあない、此店ここでは商業をはじめたな、と思ったときに戸はノックされた。

美しいお鯉——わたしは手箱に秘めてあつたものが、ほどへて開いて見たおりに、色も褪あせずにそのままあつたように、安心と、悦びと、満足の軽い吐息が出るのを知つた。

お鯉さんは朝のまままで、髪も結いたてではなかつた。別段おめかしもしていなかつた。無地の、藍あゐむらさき紫むらさきを加味したちりめんの半襟に、縞のふだん着らしいお召と、小紋に染めたような、去年から今年の春へかけて流行はやつたお召の羽織で、いつたいに黒ずんだ地味なつくりであつた。

かわらないのは眉から額、富士額の生はえぎわ際へかけて、あの人の持つ麗々しい気品のある、そして横顔の可愛らしさ、わたしは訪

ねて来て、近々と見ることの甲斐かいのあったのをよろこんだ。

それに、わたしの目をひいたのは第一に束髪であつた。かつてわたしが、束髪のお鯉を見たときは安藤てる子さんとして紹介されたので、桂公爵に仕え麻布に住んでいたおりのことであつた。

思出はさまざまに、あとからあとからと浮みあがってくる、その折お鯉は何事も思うままに、世の憂きことなどは知ろうようもないと思われた時代である。花の三月、日本橋倶楽部クラブで催された竹柏園ちくはくえんの大会の余興に、時の総理大臣侯爵桂大将の、寵おもいもの娘おんぼるの、仕舞しまいを見る事が出来るのを、人々は興ありとした。金春流こんばるの名人、桜間左陣翁さくらまざじんが、見込みのある弟子として骨を折つておしえていたというこの麗人が、春しゅんじつ日ひの下に、師翁の後見で

「熊野」を舞うといふのであつた。

「熊野」とは、「熊野」とは——その意味の深いことよ。

うつくしき人は、白き襟に、松と桜と、濃淡色彩いろよき裾模様の、黒の着附けであつた。輝くばかりの面おもに、うらうらと霞かすめるさまの眉つき——人々は魅しさられた。

——春しゅんぜん前に雨あつて花の開くる事早し。秋しゅうご後に雲無のう

して落葉遅し。山外に山あつて山尽きず。路中に道多うして道極まりなし「山青く山白くして雲来去す。」人楽しみ人愁うれふ。これ皆世上の有様なり……

ひるがえる袖、ひらめく扇。時と人のよくあつて、古えを今に
見る思いがした。

うわさ噂というものは、いかにあろうとも、軽率な侮蔑を、同性の人

にむかつて投附けるほど、向う見ずな勇氣をもたないわたしは、
ともすれば、その人の心の真を知らないものが、反感をもつて眺
めるであろうと思う束髪を見て、かえつて気が楽になつたように
思った。なぜならば、切髪というものは、昔は知らず今の時代で
は、空々しく思われなくても、日頃思つていたからで、
そらぞら形において、夫にさきだたれた独身者であるということを、証明
する必要のないものは、かえつて人目に立つて、異様な粧いよそおをこ
らす結果とあまり違わないことになるからだった。ことにとやか

くと、人が噂にのぼせたがるものがそうした姿かたちをするのは、
猶なおさら更注意をひきやすいと思つていた。

わたしはこう言つた。

「貴女が今までに、あんまり間違つたことを言われるとお思ひになつたことをきかせて下さい。新聞や雑誌に、お名前の出たころはたいてい読みましたが、そういうものはみんな忘れる事になりました。聞ききかじ噛かじつたことを興味で書かれてはたまりませんし、読む人は、他人の苦痛はいくらでも忍耐が出来ますから、面白い方をよろこびますものね」

彼女は答えた。

「本当に——最初はじめはくやしいと思つても、段々馴なれて、それに反

抗心も出て、勝手になんでも言うが好い、いくらでも書くが好いという氣になつて、意地悪になつてしまつて……」

六

彼女の頬ほおは、暖炉や飲のみ料もののためではなくカツと血の氣がさした。それを見ると、わたしは氣持ちがすがすがしくなつて、お鯉は生なますている、生作りの膾なますだと、急に聞く方も、ぴんとした。

「あたしは貴女にいろいろ聞きたいことがあるのですが、みんな後にしてしまつて、桂さんに御死別おわかれになつたあとのこと——さぞ、世評は誤解だらけでしょうから、ありのままのことをお話し

て頂きたいのです」

わたしが無作法にも、訪問記者のようなことを言出したのは、あの頃——桂侯爵の逝去ののち、愛妾お鯉に、いくら面会をもとめても家人が許さなかつたというような新聞記事を見ていたからであつた。気の弱いわたしはそこまで立入つた問とは心がゆるさなかつたので、その真偽は聞きもらしたが、思いがけない面白い——面白いといつてはすまない、その人にとれば、いままで、善を悪として伝えられ、白を黒と発表されていた事柄なのだった。お鯉という女の真意は、かくのごとく清く滞らないものであるというしることを語るには、ありのままを記しるそう。

この女ひとも意気の女だった。何もかも振りおとして、重荷をはら

つてしまおうと思うと、慾も徳も考えない気短な、煩^{うる}さがりやの、金銭に恬^{てんたん}淡な感情家なのだ。わたしは、自分にも、共通の弱点のあることを考えてほほえんだ。痛快にも思った。

人はあるいはいかも知れない。些^{ささい}細な感情などに動かされて、利害を忘れ、長き^{のち}後の悔^くを残すと——けれど、もしそういう人があつたならば、わたしは誇らしく面^{おもて}をあげていうであろう。冷徹な理性の人にも失敗はある。感情に激しやすくつても失敗はある。いずれが是^ぜ、いずれが非^ひと誰れが定められよう。感情の複雑な人ほど、美人は人間的の美をますと——

彼女は白い手に銀の小刀をとつた。赤い柿^{かき}の皮が細く綺麗にながってゆく。エメラルドは指に碧^{あお}く、思出は彼女の頭の中をく

るくると赤く、まざまざと巻返えされていると見える。彼女の眼の色は早春の朝のように澄んで冷たく、初夏の宵よいの、明星のようひとみに瞳は熱っぽく輝いた。

「わたしに残して下さった遺産は七万円からあつたのです。それから三人の子供をわたしの子にしていたのです。そうして残されたものが、わたしのものではないように、他人ひとがとやこういつて、肝心のわたしが頭をさげて利息をすこしばかり貰もらいにゆくといい、おかしな事がありましたでしょうか？」

そんなばかなことをと、誰しもがその時答えるであろう。ましてわたしには、数字は違っているが、そんな運命にあつて、二人の男の子を抱いて、物価騰貴のおりから苦しんでいる妹を持って

いるので、他人ひとごとならず感じられた。此処にもそうした女性が
あるのか、女というものはどうしてこうまで虐しいたげられ、自己の権
利を蹂躪じゆうりんされるものかと怒りがこみあげてくるのであった。

そのおり令妹のしげ子さんがはじめて口をはさんだ。

「わたしは姉ともう五年一所に暮しています。はじめは、姉が寂
しい気持ちのドン底にいた時に、わたしというものを思出して呼
びよせたのです。わたしと姉とは、まるで育ちも境遇も違うので、
行ってもどんなものかと思つたのですが、来て見ると、聞くと
見るとは大違いなので離れる事が出来なくなりました。あの時は、
全く姉は孤立で、真に心淋しかったのだらうとよく思出します。
世の中の噂のようなことが本当ならば、わたしは志望こころざしした道を

なげすて
投捨てまで、五年間もこうして姉さんをたすけていやあしませ
ん。姉さんの犠牲になつて、こうした商しょうばい業の帳付けや監督に
なんぞなりはしません」

と、しみりと言つた。全く彼女にはそう思へたに違いない。秋
田で育つて県の女学校にはいり、女医を志望していた人には、あ
まりな商しょうばい業ちがいである。

「全くこの妹には気の毒だつたのですけれど——この妹でもいて
くれなくつちや、——この家業だつて、ビールか葡萄酒ぶどうしゆでなく
つては、西洋のお酒の名さえ分らないのではねえ」

お鯉は眼をふせて面伏おもふせそうに笑つたが、

「わたしにしてもよくよくだつたのです。姉さんが気の毒でとて

も離れられなかったので、一緒にいろいろ心配もしましたが、その頃のことはわたしも知りませんでしたけれど、あとで聞いて見ると、姉は、自分の事は自分でする、他人の差図さしずやお世話にはなりたくないと思っていたらしかったのですね」

という令妹の言葉に頷うなずいて、

「ええ、そうなの。そうではないの、あの方だって、誰の差図をうけるのどのとは仰しやらなかったし、もともと遺産といつても、あの方がおなくなりになってから、御本邸の方の財産をへらして分けて頂くのでもなんでもなかったのですもの」

「では、もともと貴女のものとしてあったのですか？」

わたしはもうへだてもわすれて、率直に自分の聞きたい方に急

いだ。

「広太郎という御子息がありましたの、その方の事は大層信用していらつしやつたので、俺おれが死んだらば、直にこの手紙を子息むすこのところへもつてゆけ、そうすれば、何にも言わなくつても、すっかり分るようになっていると仰しやつて、表おもてが書きにその方の名前を書いた文ふみが出来ていましたのですけれど、その方のほうかたが先へおなくなりになつてしまつたので、それで面倒くさくなつたのです。すつた、もんだで、一年半というものは実に嫌いやな月日をおくりました。その間の苦しみて、困つたの困らないのつて、お話にやなりません。何しろその金へは手が附けられないのですものね。三人の子供と、二人の老母ははと、十人の召使ははいがいて、以

前の家に住んでいたのですもの」

おお、その時であろう、お鯉さんが貧乏していると伝えられ、あるものをみな手離しているといわれ、それはみんな彼女のふしだからだなぞと噂されたのは――

「それもね、わたしが強情ごうじようで、井上さんと喧嘩けんかをしたからですの。だって強情にもなりますわ、意地も悪くなりますわ、困らしたらば彼女頭あいつをさげてくるだろうと、弱いものいじめをなさるから、わたしはどうしても屈服することが出来なくなつて、苦しい意地も張るようになったのです」

「では、その財産をどうしようと先方むこうではいったのです？」

「利息だけで暮らせ、それを毎月貰いに来いというのです。それ

には大変な個条書きが附いていて、それで承知ならば実印を押せ
というじやありませんか。その個条書きつたら、ほんとにばかば
かしくって、とてもあたしには、さようで御座いますか、承知い
たしましたとはいえないのですもの。今度出しておいてお目にか
けましょうね、その個条書きっていうのを、あたしはちやんと取
つてあります。あんまりおかしいから、あたしは立派に張つて巻
物にしておこうと思つていますわ。しかも、あたしは押しやあし
ないけれど、立会人になった、立派なお歴々の判はおしてあるの
ですの」

「随分ばかげた事ではありませんか、そんな騒ぎをして、後^{のち}に渡
してよこした時は、七万からのものが五万いくらかになつていま

したって」

と、しげ子さんもいった。私も、

「井上伯とか侯とかは、そんなばかばかしいことでもしていなければ用もなかったのでしょうか、一体まあ立会人ていうのが誰なのです。随分世の中には暇な人が多いと見えますね、たのまれもしないことを」

「本当に頼まれもしないことをです。残して行って下さった方は、頼みもなんにもしないことなのに」

「やろうというのは、その者に充分につかわせたいからなのは分っているじゃありませんか。何だって余計なことをしたものでしょうね」

「本当に貴女の仰しやる通りよ。そのお金だつて、いちどきに沢山儲ける実業家ではなし、大臣は貧乏だったから、なかなかあれでも心にかけて積んでおいて下さったのです。よけいなものが出来ると、これはお前の分にして銀行へ入れておいてやろうといったり、臨時のことで株券なんぞが手にはいると、お前のものにしておいてやるからといって、その場で下さるものを銀行へ入れておいただけだったのです。ですから当然自分のものだと思つたのです。それをいくら問いあわせても返事をしてくれずにほつておいたのちに、井上さんへ呼ばれるといまの話——個条書きの一件なのです。

一 貞操を守る事、

一 子供の教育を自儘じまになさざる事、

一 犯みだりに外出いたすまじき事、

そんなことを読みあげて判をおせて……」

語るものも、聞くものも、顔を見合せて失笑した。

「あたし夫おくさん人じゃない、妾めかけですっていつてやったの」

なんとという簡にして要を得た、痛快な答えではないか？

七

「そうすると怒ったのおこらないのって、あの有名な癩癩かんしやくだま玉
 でしよう、それを破裂させたのです。馬鹿ツ、貴様はツて怒鳴つ

たのですけれど、あたしやあ怖こわいことはないから言つてやりましたわ。第一貞操を守る事なんて、そんなこととても出来ません。わたくしは若いのですし、旦那はおかくれになつたのですから、これからのことはわたくしの自由では御座いませんか、そんなお約束はうっかり出来ません。出来ることならばいたしますが、わたくしにはとても出来ないと思いますからいたしません。明日あしたの心さえ自分でわからないほどですもの、長い一生をかけて、どうしてそんな、とんでもないお約束が出来るものですかつて、いつてやったんです」

それは甚ひどく雪の降つた日のことであつたという。座には早川千吉郎、益田なにがし、その他錚そうそう々の顔触れが居い並ならんでいた。そ

の中へ引きいだされた彼女は、慾を捨て^{すて}いたのでそれが何よりもの味方で心強かった。彼女はこじれた金などはもう取りたくなかった。それよりも早く自由な身になって桎^{しっこく}梏^がから逃れたかった。雷^うが鳴る——はらはらしたのは仲にたつ人々であつた。世^{せが}外^{いこ}侯^うの額の筋がピカピカとすると、そりやこそお出^{いで}なすつたとばかりに、並^{なみ}居^いる人たちは恐れ入つて平伏する。そして小声で、悪いようには計^{はか}らわれないから、御^{ごも}尤^{とつと}もと領^{うな}ずいてしまえとすすめる。

「あなた方は、あの方を怒らしてしまふと後の恐^{こわ}いことがあるからでしょう。あたしはちつとも恐^{こわ}かないから嫌だ」

ここにおいてお鯉の目には明治の元勳井上老侯もなければ、財

界の巨頭たちもないのであった。たかが女一人を——その財産を、自由を、子供の教育を、何もかもを、女と侮つて、寄つてたかつて、何のために押えつけようとするのであろう。それも旦那の生前に頼まれていたとでもいうのならいざ知らず、よこあい横合から飛出して来たおせっかいである。

千金の壺つぼだといつても、その真価を知らぬものには三文にもあたいたくない代物しろものとしか見えない。さすがの老侯も物質尊重のお歴々には、あがめたてまつられている御本尊であるが、お鯉にとつては、おせっかいな世話やき爺じいに過ぎない。世外せがいどころか、おせっかいにも、他家よその台所の帳面まで取りよせて、鼻つまみをされる道楽があつた。天下の台所の世話やき、お目付けは結構でも、

老いては何とやらの譬え、ついには他人の妾の台所まで気にするようになられたものと見える。

さはあれ引つ込みのつかなくなったのは、実に思いがけない事であろう。天下に、この俺にむかつて楯をつくものがあるうかと思っている鼻さきを、嫌というほどにへし折つて、そのあげくの口上がこれである。

「面倒くそうございますから、なにもかもみんな御前に差上げます」

そして目録を書いてある遺書を、さっさとおいてお鯉は帰ってしまった。

お鯉の家の門前は急に人足が茂くなつた。手をかえ品をかえ、温顔にこわおもて恐面に、さまさまの人が、さまさまの策略をめぐらして訪問するのであつた。慰問使、媾和使こうわ、降伏説得使なのである。鯉の頭は猶なおよさら更下ろうとはしない。その多くのなかに異色ある者が二人あつた。男女互に一人ずつ、共に有名な人物である。

女は当代の名物女とゆるされた故「喜楽」の女将おかみおきんであつた。男は政界の名物法螺丸ほらまると緋名あだなをよばれた、杉山茂丸という人である。

杉山は度々仲にはいつて足をはこぶうちにお鯉のいうことに耳を傾けるようになった。そしてその方が理窟のあることだと同情してしまつた。つまり説得するものが説破せつぱされたのである。この

人はお鯉の利益になるように説くようになった。そこで、喜樂の女将が、我こそと手ぐすねをひいて出て来たのだ。自分でなければ、ああひぞつてしまった女を、説ときつ附ける腕はないと信じて現われた。

喜樂の女将のいっかつ一喝にあえば、多くの芸妓は縮みあがってしまった。う勢はやりっこいがあつた。流行妓になるのも、よい姐ねえさんになるのも、お披露目ひろめに出た時、女将の目にとまって、具合よく引っぱり廻され、運の綱を握るようにしむけてくれるからである。で、たいていな妓は、喜樂の女将の言うことに逆らわなかつた。けれども、そのおりのお鯉は、とてもそうした威おどしでは駄目だと炯けい眼がんな女将は見えてとつた。

ある日女将は輪袈裟わげさをかけ、手に数珠じゆずをかけて訪ねて来た。切髪せんぱつとなつていたお鯉こいは、越前永平寺禅師となつて、つい先の日遷せ化んげされた日置黙仙師へきもくせんについて受戒し参禅してしたが、女将もその悟道の友であつた。ものものしくも、いしくも思いついた姿でやつて来た女将は、

「今日は平日ふだんのあたしじゃあない。この姿を見て下さい。この袈裟の手前としても、いざこざなしに話をしましょう」といった。それに答えたお鯉は、

「本当に女将さんよくその姿で来て下さつた。それならば、あたしは貴女を、真に打解けてよい人だと思つて、ほんとうにはなし好いわ。貴女だつて、まさか、そうしてまで来てくださつて、皆

とおんなじようなことはおつしやるまいから」

そういうと女将は変な顔をしてしまった。そして、これはしまつたというように、

「そんな事いっちゃ、あたい困っちゃうね。そんなつもりじゃなかつたのだよ。こうして来たらば、あたしのいうことを何でも聞くかと思つてさ」

と化の皮を現わしてしまつた。

「そりやあいけないわ女将さん。ふだんの姿なりだとあたしにも義理があるけれど、袈裟をかけていて下さるとほんとに話好いのだから。第一あなたも苦勞人じゃないか、先方のいうことばかりを聞いて、こつちになつて考えてくれないからですよ。よく思つて見

ておくんなさい。誰が一番可哀そうなの、旦那には離れるし、これからさきどうしてゆこうと苦勞しているものの身になって考えて御覽なさい。貞操を守れたって、はい守りましようといつて守れなかつたらどうするの、かえつて恥じやありませんか？ そんなことは約束するものじゃありません。それから子供のことだつて、十二人もある子供で、腹違が多いから、お前の子として育つて来たものを、また他の者ほかの手へ渡しては子供が可哀そうだからと、すっかりあたしの子になさつたのを、誰に教育をたのもうというのでしょうか。犯みだりに外出をいたさぬ事というのも、あんまり人を人間でないように思っているじゃありませんか、旦那の在世のうちだつて、一々本邸へ電話をかけて、許しをうけなけ

れば一足も外へ踏みだせなかつたので、つい面倒くさいから芝居ひとつ見ないようになってたじやありませんか。これからこそ、気楽にして暮したいと思うのに、なんだかんだと煩^{うる}さい事を聞くのも、それもお金があるからだと、つくづくほしくなくなっちゃやつたんです。もともとあたしのものなだから井上の御前にあげましようって言うだけなのですわ」

「そう言われればそうだけれど、あたいは困^つっちゃったね」

困^つっちゃったと口にはいつても、言われなるとこまでも女将の胸には梁みたのであろう。なぜならば、わたしは或折この女将の洩^もした歎息と、述懐を聞いたことがある。

「あたしはありとある愁^{つら}い経験をもっていて、いろいろな涙の味

を知りつくしている。だから、どんな芝居を見ても面白い、感動する。なぜならそのどれにも共鳴するものを噛みつくしているからだ」

といったようなことであつた。あの根上りの飛上つた小さな丸まるま鬚げが、あの人の一面を代表しているようには見えだが、あの鬚の下にも、眞実はかたまつて残つていたのである。彼女もまた動いてしまった。

八

そんなこんなで麻布を引払い、大井の方へ移つた。大井の里の

家は、かなり手広なものと、すこしはなれて、梅や桃を多く植廻うえまわした小家との一軒をもっていた。狭い方のへ老母たちが住すまい、広い方へ子供とお鯉と、秋田から出京したしげ子とが住んだ。

「姉は子供が好きだったので、みんな慕っていましたが、今では三人とも手離してしまつて、淋しいのを紛らすために六歳になる女の子を貰もらつて育てています」

「柳橋から来ていた大きいのは縁附きました。も一人の女の子は十二の時に、桂二郎さんに引とられこの間それも縁附きました。その子は幼少ちいさいうちから手塩てしおにかけたので、わたしを何処までも母だと思つて居るのです。二郎さんのところへ訪ねていったら、あたしの事を、あちらの御夫婦へ大層きがね気兼するので、気が痛んで

来て、それから行かないようにしましたの。あれを手離した時のさびしさといつたら……」

暗然と、聞くものの胸にもにじむものがある。

「男の子は安藤の家督にしてあるのですけれど、その子の母に連つれあい合があつて、生みの母の縁から深く附合つきあうようになったところ、なにしろその子の義父ちちだといふので、何かと家の事へも手を出したがるし口も出すのです。それやこれやの迷惑は一通りじやなかつたので、種いろいろ々と世間からもあたしが誤解されたり、大井の広い家も売ってしまうようになって、そのかわりに、家ごとその子も先方へ持つていったのです」

「五万円のうち一万二千元ずつ三人の子につけて渡したのですか

らあまつたのは幾らもありはしません。それで桂さんの死後、ざつと十年たらず今日まで過して来たのですね。もう今は残っていません、何にもなくなつたから商しょうばい業いをはじめたのですね、ねえ、姉さん」

「母もなくなりますし、残っていた養母も去年なくなりました。木からおちた柿のように、ほんとの一人ぼっち——けれど此これ妹いがいてくれたので……」

暫時しばし、三人は黙した。ケンチャンが白いものを着て、髪かみの毛けにも櫛くしの齒はを見せて、すましかえつて熱あつい珈コーヒー琲いをはこんで来た。三人はだまつて角砂糖を入れて搔かきまわ廻わした。

「姉の考えでは、残しておいて下さつたもののあるうちは、何に

もしないで、旦那の余光で暮してゆこうとしていたらしかつたのです。そうだとは言いませんが、どうもそういう考えらしかったのです。何にもなくなつた時に、その時にお鯉にかえるのだと思つていたのでと思います」

「あたし、みんなに生別れたり死別れたりして、何もかもなくなつてしまつた時に、今日から自分の生活になるのだと、しみじみと思ひましたよ。けれど、待まちあい合あひや、料理店をはじめると、分はつき明りした区別がないので、あんな風になつたと思われまますから、はじめめるならいっそ、みんなから見張つてもらつているこんな商し業ぎょうの方が好いと思つて、ここの株式の専務ということになり

ました」

「貞操を守れの、守らせるの、いや守れないのといったって、姉の所行はわたしは見て来ています。こうして立派に過して来たのですから」

しげ子さんは客が来て中座した。そのおりをよき時と、そこにいられては聞きにくいことをきいた。

四谷よつやで生れていまもあの辺に住んでいる女から、お鯉の生家は、

いま三河屋みかわやという牛肉屋のある向角むこうかどであつたということを聞

いたことがあつたので、さまざまに取沙汰とりざたされている、この女の

生れを聞ききと定めようとした。そしてしげ子さんのことも――。す

るとその事が本当であつて、三河屋が親切にその家のあとも引取

つてくれたのだといった。

「家の退転時ほろびるときが来たのでしようか、漆屋というものは、漆のあわせかたがむずかしいもので、秘伝のようになっていたそうです。わたしを生ませた父が養子に来て死ぬころまでに、数代つづいたますやの店もいけなくなりました。妹の父が来ても家をゆずらなければならなくなつて、わたしは安藤へ養女にやられ、妹は両親と、秋田の鉾山へいつてしまったのです。後に母が病身になつたと聞いたのでわたしの方へ母を引取りましたのです。秋田には多勢の子供がありますから、あたしにはたった一人の妹を無理に貰つて、実家の片岡の方の家をつがせることにしました。おかげさまで、どうやらこの店もやってゆけます。株式をやめて、わたく

しの店にしてしまふような相談もあります。一、二年もしてやつてゆけば、妹に譲つて、わたしはわたしの何か仕事をはじめようと思つています」

長椅子の方へ来て、くつろいでこんな打明けばなしをしてから、御免なさいといつて、はじめて巻煙草まきタバコの一本をつまんだ。

お鯉さんのこれからの生活は、かなり色の褪あせた、熱のないものであろうとその時わたしは思った。彼女は羽左衛門と、三下りさんさが、また二上りにあがの、清元きよもと、もしくは新内しんない、歌沢うたざわの情緒を味わう生活をもして来た。巨頭宰相の寵ちやうあい愛を一身にあつめ、世の中に重く見られる人たちをも、価値なきものと見なすような心の誇りも知つて来た。いかなるものが現われ来て、この後の彼女を満

足させるほどその生活を豊富にするであろうか？ それは疑問だ。何にしても彼女の過去が、あんまり光彩がありすぎた。あざやかすぎた。

とはいえそれを救うのは、純潔なる魂の持主、熱烈な情熱と、愛情でなければならぬ。彼女が、生来まだかつて知らぬ、清純な恋そのものでなくてはならない。が、悲しいことに、いたずらに費消された彼女の情熱は、真純さを失って、彼女の外見のかたちよりは若さを消耗している。

彼女が子供好きで、子供がなくてはさびしくていられないという心持ちは察しることが出来る。子供ほど彼女の複雑な気持ちを害さないものはないであろう。彼女の真の慰安は——友達は、無

邪気な子供よりほかないであろう。

お鯉さんとはなしをしているうちに、その声に、いろいろと苦
 労をした人だと思わせられる響きを感じた。美人と境遇と声音こわね—
 —これもこの後心付けなければいけないと思った。それから、お
 鯉さんには、わたしが気にかける二本の横筋が咽喉のどにあつた。ほ
 んにこの筋のある美女で苦労を語らない人はない。
 考えると人生はさびしい。そしてむやみに果敢はかなくなる。

——大正十年一月——

昭和十年附記 昨年赤坂田町の待合「鯉住」の女将として、お

鯉さんが某重大事件の、最初の口火としての偽証罪にとわれ、未決に拘禁されたのは世人知るところであり、薙髪ちはつして行あんぎ脚やに出た姿も新聞社会面を賑にぎわした。おお！ 何処までまろぶ、露の玉やら――

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1921（大正10）年1～3月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一世お鯉

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>